



# Global Classrooms

グローバル・クラスルーム日本協会 報告書



2025 年度  
高校模擬国連国際大会への第 19 回日本代表団派遣支援事業



**Global Classrooms<sup>®</sup>**  
*Learn. Live. Lead.*

## 目次

はじめに .....	2
団体紹介 .....	3
議場概要・派遣報告 .....	2
参加者報告(アドバイザー) .....	4
参加者報告(派遣生) .....	6
模擬国連の先に .....	6
模擬国連を超えて残るもの .....	10
多角的な視点と開かれた姿勢 .....	12
高校生の創る国連 .....	13
夢のニューヨーク派遣 .....	14
学びに溢れた半年間 .....	16
前例のない舞台を目指すということ .....	18
BACK TO THE FUTURE OF ME .....	19
支援団体一覧 .....	20

## はじめに

平素より、一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会の活動にご理解とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

高校模擬国連国際大会への第19回日本代表団派遣支援事業を実施するにあたり、本事業にご助成、ご後援いただいた関係省庁・団体等、そして多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本年度の派遣事業では、第18回全日本高校模擬国連大会において、全国から参加した優秀な高校生の中から選考された4校8名の代表団が、デンマーク王国大使として高校模擬国連国際大会に参加いたしました。

高校模擬国連国際大会は、世界各国から選抜された高校生が一堂に会し、国際社会が直面する重要課題について真剣な議論を交わす貴重な場です。今大会においても、日本代表団は見事な存在感を発揮し、各委員会での積極的な議論参加、建設的な提案、そして他国代表団との協調的な議論を通じて、高校生らしい新鮮な視点と情熱をもって国際問題の解決に取り組みました。

参加した生徒たちは、担当国の立場から国際問題を多角的に分析し、限られた時間の中で効果的な解決策を模索するという貴重な経験を積むことができました。また、世界各国の同世代との交流を通じて、グローバルな視野を広げ、異文化理解を深めるとともに、国際社会における多様な価値観や考え方に対する理解を深めました。このような体験は、将来の国際社会を担う人材として必要不可欠な素養を身につける上で、極めて意義深いものであります。

さらに、政策発表会から渡米、そして派遣報告会に至るまでの一連のプロセスを通じて、参加者は国際問題への理解を深め、論理的思考力、発信力、協調性などの重要なスキルを向上させることができました。

本報告書では、本年度の派遣支援事業の一連の取り組みを詳細に記録するとともに、参加した生徒たちの率直な振り返りや感想も収録し、今後の事業発展に向けた貴重な資料として取りまとめました。豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出するという当協会の使命のもと、今後とも皆様のご支援を賜りながら、この有意義な事業を継続・発展させてまいります。

一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会事務局  
事務総長 田端開

## 団体紹介

グローバル・クラスルーム日本協会は、高校模擬国連活動の普及と発展を目指し、全日本大会の開催及び国際大会への派遣支援活動を行う団体です。私たちは、以下の理念に基づいてこれらの活動を行なっています。

「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出する。」

2007年、弊協会の前身たるグローバル・クラスルーム日本委員会が日本で初めて高校模擬国連国際大会への日本代表団の派遣支援を行ったことから、日本の高校模擬国連活動が本格的にスタートしました。それ以降、全日本高校模擬国連大会を毎年開催し、優秀な成果を残した生徒の高校模擬国連国際大会への派遣支援を続けています。

### 会員

アドバイザー（敬称略）

特別顧問 明石 康

公益財団法人京都国際会館理事長／元国連事務次長

評議員（敬称略）

評議員・代表理事 星野 俊也

国連システム合同監査団（JIU）監査官/元国際連合日本政府代表部次席常駐代表

評議員・理事 米山 宏

公文国際学園中高等部教諭

評議員・理事 澤田 宏

岐阜県立岐阜高等学校教諭

評議員・理事 竹林 和彦

早稲田実業学校教諭

評議員 紀谷 昌彦

日本模擬国連OB／東南アジア諸国連合（ASEAN）日本政府代表部特命全権大使

評議員 中村 長史

日本模擬国連OB／東京大学大学院総合文化研究科特任講師

## 運営会員（敬称略）

事務総長 兼 主計局長 田端 開 慶應義塾大学法学部政治学科 3 年	早稲田大学先進理工学部電気・情報 生命工学科 1 年
副事務総長 兼 研究局長 高槻 俊輔 東京大学教養学部教養学科総合社会 科学分科国際関係論コース 3 年	委員 井上 結里加 千葉大学国際教養学部国際教養学科 1 年
副事務総長 兼 総務局長 小澤 秀周 中央大学法学部法律学科 2 年	委員 江頭 志駿 早稲田大学文化構想学部 2 年
副事務総長 兼 広報局長 仲田 万智子 慶應義塾大学文学部人文社会学科 2 年	委員 佳山 榮晃 青山学院大学地球社会共生学部地球 社会共生学科 1 年
派遣担当主査 中島 大雅 東京大学教養学部教養学科 PEAK・ 国際日本研究コース 3 年	委員 北村 優翔 東京外国语大学国際社会学部国際社 会学科 1 年
派遣担当主査 小島 圭登 東京大学教養学部文科一類 2 年	委員 城戸 優空 東京外国语大学国際日本学部国際日 本学科 1 年
研究局長補佐 波多野 花凜 早稲田大学先進理工学部電気・情報 生命工学科 3 年	委員 草間 咲良 慶應義塾大学法学部政治学科 1 年
研究局長補佐 山本 晴菜 鳥取大学医学部生命科学科 3 年	委員 黒川 瞳 大阪大学法学部国際公共政策学科 2 年
推進主査 三澤 聖子 国際教養大学国際教養学部 2 年	委員 小池 翔太 東京大学教養学部理科一類 1 年
推進主査 古松 千鈴 東京大学工学部建築学科 3 年	委員 中農 陽向 東京大学教養学部文科三類 1 年
推進主査 嵐田 倖永 清華大学至善書院 1 年	委員 藤木 惇也 中央大学法学部国際企業関係法学科 1 年
委員 安達 栄都季 南山大学国際教養学部国際教養学科 1 年	委員 棚田 啓太郎 慶應義塾大学法学部政治学科 1 年
委員 稲垣 秀哉	

# 議場概要・派遣報告

## 企画名称

2025 年度高校模擬国連国際大会への第 19 回日本代表団派遣支援事業

## 主催

一般社団法人 グローバル・クラスルーム日本協会(JCGC)

## 内容

米国ニューヨーク市において開催される高校模擬国連国際大会(Global Classroom International Model United Nations Conference)に、グローバル・クラスルーム日本協会主催の第 18 回全日本高校模擬国連大会にて選出された高校生が日本代表団として参加するための派遣支援事業である。

## 参加者

### 1)日本代表団(8名)

浅野高等学校	久保田 義弘	中田 侑之介
渋谷教育学園渋谷高等学校	伊藤 澄佳	坂本 瑠璃子
渋谷教育学園幕張高等学校	高橋 咲希	本田 彩珠
小林聖心女子学院高等学校	徳弘 真椰	橋本 菜央

### 2)一般社団法人 グローバル・クラスルーム日本協会(3名)

評議員	澤田 宏
派遣担当主査	中島 大雅
派遣担当主査	小島 圭登

## 参加会議

高校	派遣者	議場	担当国	議題
浅野高等学校	久保田義弘 中田侑之介	世界知的所有権機関 (WIPO)	Denmark	Global Intellectual Property Rights in the Age of 3D Printing and Biotechnology
渋谷教育学園 渋谷高等学校	伊藤澄佳 坂本瑠璃子	国際通貨基金 (IMF)	Denmark	Structuring Alternative Debt Repayment Methods through International Trade Deals
渋谷教育学園 幕張高等学校	高橋咲希 本田彩珠	国際連合テロ対策事務所 (UNOCT)	Denmark	The Implications of Artificial Intelligence for National Security and Cyber Warfare
小林聖心女子学院 高等学校	徳弘真椰 橋本菜央	世界銀行 (WB)	Denmark	The Implications of CBDCs for Monetary Policy & Financial Stability

## 表敬訪問先一覧

国際連合大学本部

国連開発計画駐日代表事務所 (UNDP Tokyo)

国連広報センター (UNIC Tokyo)

国連ボランティア計画（UNV）東京駐在事務所

国際連合日本政府代表部

国連事務次長・軍縮担当上級代表 中満泉様

派遣生



受賞

最優秀賞(Secretary General Award)

渋谷教育学園渋谷高等学校

## 参加者報告(アドバイザー)

中島 大雅

一般社団法人 グローバル・クラスルーム日本協会 派遣担当主査  
東京大学教養学部教養学科 PEAK・国際日本研究コース3年

本事業実施にあたって弊協会の事業にご支援ご協力いただいている皆様、並びに派遣生の皆さんに御礼申し上げます。

本事業は昨年度より実施形態を変更し、本年度で2年目の試みとなりました。物価の高騰や米国の政策の変更等、渡米にあたっての障壁が高まる状況にあってもなお、本事業においては実際に代表団を現地に派遣することができました。日本の高校生に模擬国連を通じて学びの機会を提供するという、私たちグローバル・クラスルーム日本協会がその設立当初から持ち続けてきた教育的価値を、本年度も還元することができたのは偏に関係者のご理解があってこそでした。渡米にあたってご調整にご協力いただきました皆様にはとりわけ厚く御礼申し上げます。

本年度の日本代表団は昨年度に引き続き、8名の高校生から構成されていました。各人の語学力や海外経験、会議での得意分野などのバックグラウンドは異なっていたものの、会議準備やその他のアクティビティの経験を共有したこと、派遣生としての責任感と団結力を持っていきました。会議の内容面においては、立案した政策に対し、技術的・人的障壁が示されたことで、交渉の困難さとそのような中でも粘り強く合意形成を目指すプロセスを学ぶことができました。また、表敬訪問時に、実際の国連外交・国連行政に携わる方々からもどのような交渉の困難さと粘り強さの重要性についてお話をいただいたことは、派遣生にとって、表層に留まらない国際社会への理解を得た重要な学びであったように思えます。

弊協会は、「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出すること」を目的としています。本事業は、日本国内に留まらず、世界レベルに挑戦することで学びを得る大変有意義なものであることを再確認いたしました。弊協会や本事業の形態が変われど、そのような意義や理念において私たちが目指すものが変わることはありません。引き続き、全日本高校模擬国連大会を中心に、弊協会として高校生に向けてよい「学び」の機会となる模擬国連活動の普及・推進に向けて尽力してまいりますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

小島 圭登

一般社団法人 グローバル・クラスルーム日本協会 派遣担当主査  
東京大学教養学部文科一類 2年

初めに、本年度の事業の実施にあたりご協力・ご支援いただいた皆様を始め、各校の先生方、派遣生一同に心より厚く御礼申し上げます。私は本事業にて、高校生の会議準備のサポート並びに渡航に向けた調整を行ってまいりました。

多くの方々のご尽力・ご協力もあり無事本事業を終わらせることができました。本事業における課題解決のために関係者の方々に協力を仰ぎつつ次年度以降の派遣事業の成功と発展に向け引き続き尽力してまいります。

本大会では日本での模擬国連と異なり全ての議論を英語で行う必要があるため準備段階では派遣生は慣れない専門用語の並ぶ難しい議題に悪戦苦闘していましたが、政策発表会などを通じて入念なりサーチで徐々に議題と自国のスタンスの理解を深め、大会本番では一国の代表として堂々と発言し十分なプレゼンスを發揮して会議をリードする立場となることもできました。更に大会以外の場面におきましても、派遣生は表敬訪問を通じて実際の外交の場に触れるという刺激を得ることができ、また米国の街に触ることで文化の違いを体感するとともに日本という国を外から俯瞰する貴重な体験もできたかと思います。大会参加と渡米を通じて、派遣生が自身の将来について思いを馳せるとともに日本や世界の為に自分がどのような貢献ができるか、という点についても考える契機になればと思います。

また、今回の派遣を通じて準備段階より派遣生は交流を深め渡航の終わる頃には派遣生は非常に強い結束力を持つことができたように感じます。これは、議場は違えど国際大会という経験したことのない大きな試練に正面から立ち向かい乗り越えるという唯一無二の経験を仲間として、ライバルとして分かち合ったからこそ得られたものであると思います。今回の派遣を通じて、かけがえのない経験と仲間を得て大きく成長した派遣生は、これから先にある新たな試練にも果敢に挑み続け、刻々と変化する国際社会においても次世代のリーダーとして活躍することができると確信しております。

最後に、本事業にご支援ご協力賜りました皆様並びに携わったすべての方々に改めて感謝を申し上げ、私からの報告といたします。

# 参加者報告(派遣生)

## 模擬国連の先に

久保田 義弘 浅野高等学校

### 事業概要と派遣前準備期間

「コートジボワール大使。」

2024年11月17日、高校模擬国連全日本大会表彰式で呼ばれた瞬間から、我々久保田中田ペアのNY派遣への長く険しい道が始まりました。

嬉しさとは別に、苦難を共にしてきた仲間たちの思いを胸に使命感を感じ、背筋が伸びた瞬間でもあります。帰国生ではない我々にとってNYという大舞台で英語会議に参加し最高の結果を残すという未来は簡単に想像できるものではありませんでした。ペアや先輩と相談を重ねながら来たる五月の本番に向けて準備の計画を練りました。

まず我々が第一に直面したのは英語力の壁です。日本模擬では公式討議以外は日本語。言語が変わるのは単なるツールの変化ではありません。ニュアンスの理解、語彙云々はもちろんのこと、相手との対話の中で雰囲気づくりをしてくれるのも言語です。人との対話を重視する模擬国連にとってこの部分が欠落するというのは致命的な弱みに直結するのです。

そして第二に立ちはだかったのが、海外模擬国連とのカルチャーギャップです。1年間どっぷり日本模擬の“常識”に染まった我々は先輩から細切れに聞く海外模擬の噂のようなものに実感がわからず、どんな形式の何に対して対策すればよいのかもつかめない時期が続きました。英語力が武器とするなら、どんな敵が来るのかもわからないといった感覚です。

そこで我々は軸となる目標から逆算して目下の課題の解決法を模索しました。NYを終えてどんな姿でいたいか？どんな大使になりたいか？自問自答の末たどり着いたのが以下の二つの軸です。

### 愛される大使に

ボスではなく愛されるリーダーを目指す。このことがまず僕たち二人の共通の、そして最も大きなゴールでした。日本模擬時代から掲げてきていたモットーですし、引退会議となるNYでは最高の形で達成しなければならない目標です。

### 自分たちの良さを曲げない

海外模擬の特性に合わせて自分たちのスタイルを大きく変えるというのも一つ選択肢として十分に合理的です。しかし先輩のアドバイスや何より自分たちで対話をする中で、一年培ったスタイルはだれにも負けないという自信がありましたし何より付け焼刃の別のスタイルでいい結果を残せるビジョンが見えませんでした。日本模擬での経験とスタイルが海外模擬で十二分に通用すると示そうと二人で誓ったのを覚えています。

海外模擬の雰囲気と英語で模擬国連をする行為自体になれるために、1月から3月にかけてすべての英語会議に参加しました。初会議となった JEIMUN では英語で考え方難しさを思い知りつつも、今の自分の英語力の程度と、目標となる優秀な大使たちと出会い、漠然としていた目標が地に足ついたものに変わりました。海外模擬の「スタイルを知る」という意味では公文国際学園での MUNK、そしてさらに海外模擬のスタイルに忠実だったのは三月の JMMUN です。

このころには継続していた二人での英語ディスカッションも相まって、英語で議論することに馴れ最優秀賞をいただくまでになりました。後述しますが「セカンド」や個性的なスピーチに触れたのも初めてで、海外模擬の楽しさを知った実りある会議でした。

さて、このころになるといよいよ NY の GCIMUN への直接の準備が大詰めになってきます。議題は12月に発表され、4つの中から希望を出して日本代表4チームに振り分けられます。我々は世界知的所有財産機関 WIPO 「3D プリント技術とバイオテクノロジーにおけるグローバル知的財産権」という議題でした。先進国と途上国の特権とアクセスをめぐる対立が主で、デンマークは特に両産業に強い国として非常に重視する議題です。

NY 派遣事業では3月に政策発表会という形で練り上げてきた政策を専門家の方などの前で発表しフィードバックをいただくというイベントがあります。これに向けメンターの方と準備を進め、無事この会を通して改善点を明確化することができその後の準備に大いに役立ちました。4月第一週に PPP を提出して以降は本番により焦点を当て、友達やペアと当日を意識したディスカッション、スピーチのブラッシュアップを行いました。

もう再来週、もう来週、と緊張しながらもこの半年の準備に自信を持ち、心のどこかで早く会議で発揮したいと指折り渡米の日を待っていたような気もします。

そしていよいよその日がやってきました。早朝に空港に集合し NY に昼に到着する飛行機に乗っていよいよ飛び立ちました。半日超えのフライトの末、NY 到着後にはなんと JAL の機長からアナウンスでわざわざ応援メッセージをいただき、メンバー一同感激しました。初めて吸う NY の空気、香水のにおいに心躍らせながら、早速着いたその足で現地の日本政府代表部と国連本部へ表敬訪問に向かいました。

### 表敬訪問

その日は日本政府代表部で梅津茂大使、そして国連本部にて国連事務次長中満泉様とお話をさせていただく機会をいただき、また二日目には国連本部でPKO関連の仕事をなさっている山口様にもお話を伺うことができました。

この表敬訪問を通して、我々が見たものは「本物の外交の姿」です。

外交とは単なるロジックの戦わせ合いや厳かな会議室のみで行われる恐ろしく冷静な交渉ではなく、むしろその最前線にいたのはどこまでも「人間」でした。日本の模擬国連においてしばしば目にするのが、人が話しているのに人が話していないかのような、お互いのロジックが互いを傷つけ合うだけのような冷たい交渉です。無論模擬国連は外交官を模擬し責任をもって政策を発表するわけですから緊張感は欠かせませんし私の感情は挟めません。しかしそれでは機械でいいのではないのでしょうか？私情も表情の機微も、なんの“無駄”もないメカが代わりにすればいいのではないのでしょうか？

違います。お三方は口をそろえて強調されました。外交とはただの交渉では無く人間としての関わり合いであると。他人の目を通じて世界を見、自分が相手にどう映るのか。その塩梅を探りながら、たとえ不可能に見える交渉でも互いにどこかで分かり合えると強く信じる。その時間を互いに共有し、“にぎりあう”営みなのだと学びました。

特に山口さんへの訪問の際カフェテリアでお話を伺っていると、「実は交渉は会議室よりもカフェテリアで進むなんていうことも多いんですよ。ほらあそこでも。」と視線を向けた先では、大使と思しき大人たちが食卓を囲みながらコーヒー片手に交渉をしていました。

言葉での理解が、全身でのインスピレーションに変わった瞬間でした。

### 海外模擬は実践の最高の舞台

そして二日目の午後からはいよいよ GCIMUN が始まります。

我々が register をしにホテルに向かうと世界各国から参加する 1000 人超の同世代の若者たちが会場前に集い談笑していました。表敬訪問で知った本物の外交官の姿がよぎり、迷いなく友達を作りに行きました。基本的に代表団としての参加なのは日本くらいで彼らの大半は授業の一環や趣味などで参加しています。会議開始が迫りいよいよだぞと 8 人で喝を入れ合ってそれぞれの会議室へと向かいました。

### 海外模擬の特色と実践

先述の通り GCIMUN という場所は我々が表敬訪問で得た学びを直接実践するうってつけの舞台でした。これには海外模擬ならではの特色がかかわっており、第一に「人としてのかかわりあい」を最重要視する雰囲気があげられます。9割以上がネイティブのなかで、"Hey Yoshi and Yuu!!"と大半の大半に名前を覚えてもらい、大使である以前に人間としてかかわることが求められているのだなと感じました。また日本では御法度の時間外交渉に関しても、昼夜問わず「どうしてダメなの？」といった文化であり、フレキシブルに時間を活用できます。賛成の意思を示す「second!」という掛け声、そしておそらく日本模擬しかやったことのない人が見たら最も驚くであろうものが彼らのスピーチです。彼らにとってスピーチ台は要らないようです。フロアを歩き回り、有名企業の社長スピーチのように自信満々で政策を語ります。

僕たちデンマークも表敬訪問で学んだ「血の通った議論」の大切さを胸に、見よう見まねでそういったスピーチを取り入れ、これが予想以上に好評でした。

詳細の会議行動は割愛しますが、「人としてかかわりあう」を常に意識し、最終的には最も多くの友達を作り、セレモニーでは Denmark chant をしてもらえるほどになりました。

自分たちの提出した DR が可決されみんなで輪を作りねぎらいあう、模擬国連人生を締めくるにふさわしい最高の雰囲気の会議でした。

立てた二つの目標は十二分に達成されたのではないかと振り返ります。

派遣事業でしか得られないもの

全日本大会を勝ち抜いた先にある NY での体験は想像をはるかに超えていました。

肌で感じる人間の活気。あの映画で見たことのある街角の景色。おいしいご飯の数々。

そして表敬訪問と会議を経て得られる人間としての成長が待っていました。

模擬国連はゴールではありません。

模擬国連はおとの世界の先取りなのかもしれないとつくづく思います。人の目を通して世界を見、その人が求めることと自分の理想をすり合わせながら、最後には一緒にハンバーガーをほおばって笑いあう。その営みはもはや交渉としての「外交」の枠組みを超え、弁護士、教師、セールスパーソン、どこにいても一番に求められることなのではないかと気づかされました。そんな“外交”的”の姿を最高の舞台で学ばせていただいた、このすべての経験とご支援に深く、深く感謝申し上げます。

模擬国連人生を 19 期日本代表団として締めくくれることを心から誇りに思っています。

## 模擬国連を超えて残るもの

中田 侑之介 浅野高等学校

2024/11/17 「B 議場最優秀大使賞、コートジボワール大使」

あの瞬間に感じた、全身がざわめく感覚、同時に降り注ぐ経験した事のない重荷と責任の圧を今でも鮮明に覚えています。それが僕の新たなチャレンジの日々の始まりでした。

NY 派遣までの準備期間は非常に印象的で有意義であり、またある種自分にとって「模擬国連」再考のこの上ない機会もありました。「専門性の高い議題リサーチ」「MUN 的な戦略立て」など日本における模擬国連の延長線上として行う受動的準備は無論、全力を尽くしました。ただそれよりも「試行錯誤して臨む英語力向上」「自分の描く理想の大使像」それを超えた「模擬国連をする理由」など、能動的な「準備」ならぬ「追求」が深く印象に残ります。特にその貴重な追求の過程で得た模擬国連の枠組みを超えて自分に残る、「多角な人間的成长と財産」、そしてその獲得に自分なりの「模擬国連」を見出した事がNY派遣までの準備期間で得た最たる物でした。

そんな5ヶ月に及ぶ準備期間を経ての実際のNY派遣は、更なる発見と成長の絶好の機会でした。実際の梅津大使、山口大使、そして中満大使への表敬訪問では外交の最前線でご活躍される方々に国際社会における洞察と知見を得る機会を頂け、それは自分の「大使像」の輪郭に磨きをかけ、同時に激動の現代を生きる「若者」としての責任と役割を再認識させる物でした。特に中満大使からの複雑な社会的背景と正義の混在する国連における「人類全体の共通益を考えられる明確なvisionと信念を持った大使へ」や、国連カフェテリアでの山口大使からの「人間として好かれる本物の外交・大使へ」というお言葉は、素より我々ペア間で理想としてきた「人間的情熱を持った愛される国連大使へ」に自信と希望の兆しを与えるものでした。

実際のNY国際大会は自分にとってそんな準備期間と表敬訪問を通じて磨きをかけた「理想的の大使としての自分」を演じる最後の最高の舞台でした。不安や緊張は消え去り、明確な理想の「大使像」と最高の自信を持ち合わせて臨んだ国際大会は、元来の目標を大きく越え、「先進国グループのリーダー」「可決DRの提出国」など、大成功を収める事が出来ました。ただ「日本の模擬国連の延長」としての会議結果よりも、理想の大使を演じた結果、NYで初めて感じたあの「他国大使が背中を押してくれる感覚」、「議場が自分達を歓迎してくれる感覚」、「一人間として彼らと最高の会議を創れた感覚」がより印象的で心に響きました。そして何より会議を終えて彼らと一人間として関わる時、理想の大使として演じた自分がいつしか自分に染み込み、成長した自分になっていました。

「世界は”外交”で溢れている」そんな言葉をペア間で話します。多様な価値観が混在し、グローバル化を余儀なくされる現世において、「他人のレンズに切り替えて決定的な違いを前にリスクをもって飽くなき対話に臨み手を取り合う」。そしてその過程において「情熱とビジョンを持ち愛される人」となる。そんな「外交」は国連に限らず、「今」を等しく生きる全員に通ずる大切なことだと感じます。

NY派遣で得た財産は多種多様です。「眠らない街」として世界経済やトレンド、芸術とエンターテイメントの牽引地として活気に溢れるNYCの雰囲気、美しい街並み、歴史と外交の最先端が交錯する厳粛な国連総会議場、そしてそこで生きる人々など、五感で”感じる”経験

から、会議を通じて得た様々な国の友達、議題と国際情勢に関する高度な知識と考え、そして何より優秀で一緒に国際大会を乗り越えた自慢の派遣生のみんなとの繋がりなど、形として残る財産や大切な思い出までその全てが NY 派遣を終えた今でも残り続けます。

一方で、そんな NY 派遣を通じて我々に残る財産を今度は自分たちの力で、自分なりのやり方で模擬国連を超えて国際社会に還元する事もまた、「派遣に携わらせて頂いた者」として、また「若者」としての責務である様に強く感じます。

そして日本の模擬国連に携わる大使と先生の皆さん!! どうか模擬国連の本質に「異なる他者の視点を受容し理解し尊重する」という要素が存在する以上「こうであるべきだ」という視点から一步脱却し、「こうでもあるのか」という視点を持ってみてください。それはあなたをより”外交”にし、新たな気づきと成長を与えてくれるはずです。

最後にこれまでサポートして下さった GC の皆さん、派遣事業に関わる全ての方々、模擬国連でお世話になった同輩と先輩・後輩、先生方、同期の派遣生のみんな、そして一年半共に歩んでくれた相方へ、心より感謝を申し上げます。本当に本当にありがとうございました。

## 多角的な視点と開かれた姿勢

伊藤 澄佳 渋谷教育学園渋谷高等学校

小六の時に初めて出会った模擬国連、今度はどの国を担当するのかと、会議の前は毎回胸を躍らせていました。今回の派遣事業でも、模擬国連を通して自分の視野が広がっていくことを強く実感しました。

私達は、IMF（国際通貨基金）を舞台とした会議にデンマーク大使として参加しました。議題は「国際的貿易協定を通じた代替的な債務返済システムの構築」であり、貿易協定を用いた支援策やIMF主導の財政調査の他、インフラ整備、雇用問題や輸入過多など多様なトピックを扱う、幅広く且つ奥深いものでした。

担当国のデンマークは輸出大国であり、貿易協定の恩恵を受けてきた国です。議題との関わりはあるものの、自国の経済は安定しており、特に喫緊の課題がある訳ではありませんでした。そんなデンマークの立場から議題の何に焦点を当てるのかが、準備過程での重要課題となりました。長い間悩んだ末、デンマークが特に支援している国が抱える課題なども調べることで、なんとか雇用問題や貿易協定の調査に関する政策にたどり着くことができました。加えて、環境問題に関する政策も練ることができました。担当国自身だけでなく、担当国が支援する国々の立場に立って調べることも、担当国について多方面から理解を深める上で役に立つということを、改めて気づかされました。

会議当日も同様に、多角的な視点や視野の広さなどが大いに必要とされました。EU諸国で集まって話すであろうという発想は会議序盤にして打ち碎かれ、大使は皆既存の枠組みにとらわれることなく周囲と話し始めました。同じ議論グループにデンマークと地理的に遠い国が大勢いたことはとても新鮮で、物理的な距離を越えて共通の課題や解決策を見いだせた時は、この上ない達成感を抱くことができました。議論をする際、話している大使の政策やスタンスを知りたいという姿勢を前面に押し出すようにも心がけました。様々な政策に触れることで、自分たちのグループの政策を磨き上げ、より実現性の高いものにすることもできました。

NYに滞在する間、国連事務次長の中満泉様を始めとする多くの方々にお話を伺いする機会がありました。特に印象的だったのが、軍縮などの課題解決は、全ての国にとってのインセンティブ作りから始める必要があるというお話をした。他者の立場に立って物事を考えることは、結局、国際的な課題解決の第一歩であると感じます。今後も、模擬国連の活動の場でもそれ以外の場でも、他者と積極的に対話をし、相手をより深く理解することを通して、自分自身の視野も広げていきたいと思います。

会議の準備過程も当日も、本当に多くの難題が立ちはだかりました。それでも、支えてくれるペアや19期の仲間のおかげで乗り越えることができ、生涯の友情を築くことができました。

最後に、このような貴重な機会を作ってくださったグローバル・クラスルーム日本協会及び支えてくださった全ての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 高校生の創る国連

坂本 瑠璃子 渋谷教育学園渋谷高等学校

「外交力」一それは単なる説得ではなく、徹底して相手を理解し、互いに満足できるような妥協を生み出す力のことを言います。今回の派遣事業、そして昨年度の全日本大会を通して、私はこの外交力を体で会得しました。

国際大会では、私達は国際通貨基金（IMF）を舞台に「国際貿易協定を通した代替的な債務返済システムの構築」という議題で議論をしました。担当はデンマーク大使。伝統的な債務返済手段から産業の育成、インフラ整備などと多岐にわたる議論が行われ、その中でもデンマーク大使として環境保全を達成するために行動しました。

会議は3日間にかけて29階にある部屋で行われました。ビルの上層部で大きなガラスの窓から太陽が差し込むあの狭い議場で、約50ヵ国の大使一人ひとりが自分達の政策について熱く語る姿は眩いものでした。国際大会では一段と自分たちの政策に対する愛着が強く、交渉を試みても決して引き下がらずに主張を続ける大使たちが印象に残っています。しかし、表面上の対立はあっても、目指すべき執着点は同じです。非公式討議だけではなく、公式討議のスピーチや会議外の時間も最大限に活用し、私達デンマーク大使はコンセンサスに取り掛かりました。

ここで肝となったのが「外交力」です。表敬訪問で国連本部を訪れた際に、国連の最前線で活躍される方々のお話の一環で、本来の国連での交渉は会議と会議の間も絶えることなく密かに続いているというものがありました。実際、私達が国連本部の食堂で昼食をとっているときも、すぐ隣には大使に思える見た目の方々が座って静かに議論するテーブルがいくつも並んでいました。これを参考に、会議で私たちは「本物の国連」を模擬しました。常に相手を知りたいという姿勢で、将来に繋がる議論と関係性を築く意識が会議自体の成功にも繋がったと思います。

今日の国際社会に目を向けると、しばし国連の機能不全を感じることもあるかもしれません。必要な拒否権の行使だったり、歯止めの効かない紛争だったり。安保理改革や死刑モラトリアムのように歴史的に議論が停滞している議題もあります。しかし、私達高校生が希望を捨ててはなりません。この度国際大会に参加して目の当たりにしたのは、国際問題と真摯に向き合う高校生の姿で、非常に勇気を貰えるものでした。世界中から集う高校生達、出身も今まで歩んできた人生も全く別物でしたが、それに関わらず「模擬国連」を通して分かり合うことができる事実に感心しました。この派遣事業を通じて得たこの大変貴重な経験と友人関係を糧に、今後も精進して参ります。

最後になりますが、JCGC事務局員と評議員の先生方をはじめ、派遣事業を支えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 夢のニューヨーク派遣

高橋 咲希 渋谷教育学園幕張高等学校

今回、小学生の頃からの夢だったニューヨーク派遣が叶いました。中学受験時代、志望校であった渋幕のパンフレットで模擬国連の国際大会で最優秀賞を獲得したことを目にし、合格したら必ず模擬国連部に入部することを心に決めていました。昨年の全日本大会で優秀賞をいただいた時、その努力が実ったように感じました。ニューヨークでの国際大会の参加や派遣を通じてさまざまな気付きや学びがありましたのでご報告いたします。

まず、国際大会に参加し、周囲とのコミュニケーションを取ることが大切だと感じました。日本の模擬国連とは少し異なり、会議後だけではなく会議前から交流の輪を広げることはアメリカの模擬国連では重要です。会議直前に知り合った人でも、顔や名前を覚えてもらえるとすぐ信頼してもらい、話し合いも進みやすかったです。また、海外では日本ほど模擬国連は競技化されていないようにも感じました。アメリカでは「相手を論破して自分を優位にする」という姿勢はあまり感じられず、対話を通してさまざまな意見を聞き、どうしたら多くのメリットを見出せるのか、と言う議論の方が繰り広げられていたように感じます。

また、表敬訪問でも学ぶことができました。国連大学、日本政府代表部、国連事務局などに伺い、どのお話も刺激的でした。特に印象的だったことが、中満泉さんから聞いた、我々若者の持つ力でした。昨年の9月国連では未来サミットが開かれ、「未来のための協定」がコンセンサスで採択されました。全日本大会の議題でもありました。国連が今注目しているのは「現在」ではなく、「未来にバトンをつなげるにはどのようなことを今から徹底すべきなのか」ということです。軍縮、開発、環境問題などさまざまな問題を解決するには若者の力は必要不可欠だ、つまり「まだ高校生だから何もできない」と言う考えを改めて、「若者だからこそできることがある、自分に関わる問題だからこそ主体的に動くべきだ」という考え方を自分自身も改めるべきだと思いました。そのツールとなるのが模擬国連です。模擬国連は、準備段階から自分と異なる意見に親しみ、会議では他の考えの大天使と対話を重ねることで、なるべく多くの意見と触れ合うことができます。それを通じて、自分自身の意見も少し柔軟になります。中高生でも世界情勢・社会問題を身近に感じることができるので、今回模擬国連の素晴らしさを改めて実感しました。表敬訪問を通じて国連の活動にさらに興味が湧きました。国連はもちろん決議を通して国際的な枠組みを作るだけではなく、支援活動も世界中で行っており、正社員だけでもなくボランティアやインターンとしても国連に関わることができると初めて知り、興味を持ちました。大会や表敬訪問を通じて、学んだことは生涯を通してこれらを大切にしたいと思います。

派遣は大会や表敬訪問だけではありませんでした。楽しみや感動の溢れる旅になりました。小学生の頃アメリカに住んでいた私にとって、ジョン・F・ケネディー空港に着陸した瞬間、故郷に帰った気分になりました。世界で一番好きな都市をまた一望することができ、仲の良い他の派遣生ともこの同じ空気を味わうことができ、嬉しさに満ち溢れました。初日はみんなで首を長くして待っていたブロードウェイショーを観に行き、2日目はお気に入りの書店に派遣生や顧問の先生方と一緒に行き、3日目はゲリラ豪雨で新しい服をその場で購入しなくてはならないほど濡れてしまったことなどを鮮明に覚えています。最後の夜はミニゲームをし、たくさん話し、気付いたら夜が明けていました。派遣で培った友情や思い出が私にとって最大の宝物です。

最後に、派遣に関わった全ての皆様に厚く感謝を申し上げます。準備が大変で落ち込んでい

る時に励ましてくれた家族や友達、色々とアドバイスをしてくださった先輩や顧問の先生方、準備段階から全ての面でサポートしてくださった GC のスタッフ、一緒に頑張ろうと日々励ましてくれた派遣生の皆さん方には感謝してもしきれません。ニューヨークでの 6 日間は夢のようでした。本当に本当にありがとうございました！

## 学びに溢れた半年間

本田 彩珠 渋谷教育学園幕張高等学校

### 準備および会議の概要

GCIMUNへの準備が始まったのは全日本大会から一ヶ月ほど経った12月のこと、グローバルクラスルームのスタッフさんと共に自分たち自身の全日本大会での行動および準備等を振り返ることで、自分達ペアについて分析をし、国際大会に向けた準備の姿勢、意識を作ることから始まっていきました。そこから1月の上旬には国と議場の発表があり、その後は2回のSPの作成を通してリサーチを進め、3月下旬の政策発表会に参加し政策をブラッシュアップしたのち、4月の初旬にPPを提出し、4月末の大会本番に参加、という流れが概要となります。私がこの準備期間の間に学んだことは2つあります。1つ目は、自分達なりに試行錯誤を繰り返すことの大切さです。私たちのペアは組んだ年数が長く、経験が多い分、どのような状況下でも何となく既視感があるような無難な対応をしてしまうということが多かったのですが、今回初めて国際会議に参加する上でペアの間での英語力の差というとてつもなく大きな壁に初めて直面しました。どのように進めて行けばいいのかお互いわからない状態の中、大会までの準備期間は有限であるため、何とかしてその壁をクリアしようと人に話を聞いたり、何かアイデアを思いついたりしたらとにかく実践してみる、そんな過程を経て失敗も含めて試行錯誤の大切さを実感しました。2つ目は多面的な視点から国を見てみる大切さです。普段の会議では準備期間が限られているため、一つのトピックに関しての担当国を掘り下げていくリサーチを行いますが、今回の会議では準備期間が長かったため、議題や国に関する文献を読んで様々な背景知識を学んだり、派遣団全員が同じデンマークで他議場に参加するため、他の議題におけるデンマークの姿や侧面を学んだりすることができました。この準備を経て普段のように一面を切り取った担当国の理解よりもより深く担当国や議題の理解をすることができ、見方を変えることの大切さを学びました。

### 実際の会議の報告

実際の会議は4月25日から27日までの3日間で開催されました。我々の参加した議題は「AIと国家安全保障。サイバー戦争への影響」でUNOCTという議場設定でした。我々の議場は特に大使の数が多く、約60カ国の大使が参加しており、非常に活発な議場でした。

実際に会議に参加することによって自分がいかに狭い模擬国連しか知らないかということを実感しました。NYの模擬国連はルールの面でも文化の面でも価値観の面でも日本の模擬国連と違う部分がたくさんあり、今まで知らず知らずのうちに自分の中で形成されていた固定観念のようなものがいい意味で崩されるような刺激をたくさん受けました。5年間の集大成として今までと全く異なる会議に参加するということは、新たな学びにもなりましたし、すごく貴重な経験となりました。

### 表敬訪問の報告

表敬訪問は3月下旬に国連大学を訪問し、NYでは日本政府代表部と国連事務総務を訪問しました。どの方のお話もとても素敵でたくさんの気づきを得ました。中でも一番印象的だったことは外交についてのイメージです、私は今まで5年間模擬国連をやってきて、国連大使

というものを模擬してきたつもりでしたが、実際の大天使や外交というイメージを漠然としか持っていたいなかったということに気付かされました。授業で聞くような条約や会合の結果など、それ単体では無機質に感じるものが、実際の世界で人と人が議論に議論を重ねて作り上げた結果であること、また外交や政治は硬くて厳格なもののように感じていましたが、カフェで膝を突き合わせながら語り合うといったような暖かいもので人ととの交流によって構成されているものであることを実感しました。

## 総括

会議や表敬訪問、制作発表会、メンターなどを通してたくさんの気づきや学び、刺激を得ることができました。それと同じくらい貴重な経験になったのは、やはり19期の派遣メンバー7人と出会うことができたことです。全員が多様で深い考え方を持っています。高校生活も終わりが見えてきた今、このような貴重な経験をすることができたことは本当に幸せなことだと思っています。この経験で吸収できたことをこれから先様々な場面でたくさん生かしていきたいと思います。

## 前例のない舞台を目指すということ

徳弘 真柳 小林聖心女子学院高等学校

模擬国連を始めて早二年。気がつけば私は模擬国連に夢中になっていました。とはいっても、学校から前例のない派遣への切符を手にするまでの道のりはとても長く、また国際大会のノウハウを持ち合わせないなかでの会議準備は、右も左もわからない状態から始まりました。

私たちは World Bank を議場に、CBDC（中央銀行デジタル通貨）の導入について議論しました。英語での BG（議題解説書）・初めての経済関連の議題に自身の力不足を感じる中、日本が CBDC を導入しない方針であることも相重なって情報収集にはかなり苦労しました。また私たちが担当したデンマークは、EU 加盟国でありながら CBDC に関しては EU と正反対のスタンスをもつため、国益と EU 内での立ち位置の双方を追求することが非常に難しかったです。そのような状況の中奮闘している姿を多くの方に認めていただき、外務省・日本銀行・世界銀行・大学など各分野の最前線でご活躍される方々に、様々な助言や示唆をいただきました。その度に立案した政策を新たな視点から見つめ直すだけではなく、模擬国連での学びが「模擬」の域にとどまらず、現実世界に繋がっていることを実感できました。このようにして、私は「学ぶこと」「考え抜くこと」の真の楽しさを見出していました。

会議当日は渡米までに培った知識が自信となり積極的に他国と交渉することができ、決議案提出のスポンサー（代表国）として会議を終えることができました。日本では賛同が得られるであろう提案が受け入れてもらえず、戸惑うことも多い三日間でしたが、そうした日本と国際大会の違いが面白く、何より世界中から集まった同世代の生徒と議論を交わせたことに達成感を覚えました。

そして派遣生の皆さんに出会い、同じ目標に向かって共に走りきれたことを心から嬉しく思っています。NY 派遣までの過程の中で、壁にぶつかる度にある種の孤独を感じることがありました。それでも眠い目をこすりながら政策立案に励むときには、関西と関東で離れていても伝わってくる彼らの頑張りに幾度となく勇気づけられました。私と同じ熱量で、ないしはそれ以上の何かを模擬国連に捧げてきた派遣生の仲間に出会えて幸せでした。

今回の派遣は私個人としての大きな目標であったと同時に、ライバルとして共に成長してきた関西圏の模擬国連大使たちや、NY 派遣を目指している後輩たちの熱意を背負った挑戦でもありました。過去の派遣生や他 3 校の派遣生と比べると、経験もとびぬけた能力も持ち合わせない私たちペアが派遣生になれたことは、ある種特殊なことだったように思います。3 月に行われた政策発表会で、私たちが派遣生に選ばれたのは「特別な何かに勝るほどの自信とそれに至るまで考え方」という事実があったからであり、「小林聖心が頑張っているということが、たくさんの人の励みになる」と尊敬している GC の方に言っていただいたことが忘れられません。模擬国連を通して、達成できないかもしれない目標に出会ったとき、憧れのままで終わらせずに実現させることの尊さを学びました。この文章を読んでくださっている方々が私と同じように、夢を追い求める勇気をもたれますように。

今後は模擬国連を通して得た様々な力を活かして、自分のためにも世界のためにも変化を生み出すことのできる人へと成長していきたいです。高校生のうちにこれほどまでに夢中になれるを見つけること、また努力できた経験は、私にとってかけがえのないものになりました。支えてくださった全ての方々に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

## BACK TO THE FUTURE OF ME

橋本 菜央 小林聖心女子学院高等学校

グローバル・クラスルーム日本協会の第19回日本代表団派遣支援事業により、ニューヨークに派遣されて高校模擬国連国際大会に参加しました、小林聖心女子学院女子高等学校の橋本菜央です。「金融政策と金融安定性に対するCBDCsの影響」という議題のWB議場でデンマーク大使として会議に参加しました。

日本で模擬国連に参加していると、各学校で受け継がれてきたマニュアルや必勝方法があり、参加者が決められてレールに沿って、規範に沿った良い“らしい”選択をするような会議行動を目にすることがあります。自分で考えて行動することが大事なのであって、果たしてそれらは個々の成長につながった行動なのだと疑問に思うことさえありました。そのような他者の行動や共通認識は、私の心も体も、動きづらくさせるものでした。ですが、国際大会では、会議中にそもそも参加しない、退出するなどの生徒が多数存在し、それだけでなく初めての模擬国連で会議のルールも理解していない生徒が存在し、模擬国連の会議行動における暗黙のレールが無いことに驚きを隠せませんでした。また、国際大会ではモードが多く取られ、全体の三分の二ほどが各大使のスピーチを聞く時間でした。個々の意思が尊重され、レールが存在しない会議で個々が野原を自由に駆け回るような会議行動をする光景は、私にとって新しいものでかつ、大切なことに目覚めた機会にもなりました。私自身の意思を同調圧力や他者との空気を読むことで委縮させられるのではなく、自分がしたいことを自由に、自分なりに、行動していきたいと強く認識させられました。

話は変わりますが、私たちは表敬訪問を通して、様々な方とお会いする機会に恵まれました。最も感銘を受けた訪問は、国連事務次長・軍縮担当上級代表中満泉さんです。私は、趣味として100数年後の世界を予想するほどSFが好きで、その好奇心から「これからのAIと人間の共生について」の考えを中満さんに聞いかけました。中満さんは様々な興味深い考えを返答してくださったあと、非常に心を惹かれるをおっしゃいました。「AIと人間の共生は遠い未来のことではなくて、10年後とかもうすぐ訪れることなのかもしれない。」私は、SF映画のような心が躍るファンタジーは遠い将来のことだと無意識に決めつけていた。ですが、すぐ近くに訪れるのかもしれないという可能性の提起が私にとっては、突然、死角から訪れた考えもしなかった発想に思えて、今までの価値観が変わってしまうほどものでした。

最後になりますが、模擬国連の活動や、この派遣事業を通して様々な学び学びや気づきを得ることができました。グローバル・クラスルーム日本協会と後援企業の皆様などすべての方々に深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

## 支援団体一覧

本事業の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させて頂きます。

### 後援

外務省  
文部科学省  
国連広報センター

### 協賛

株式会社 JTB

### 協力

日本航空株式会社

### 助成

公益財団法人公文国際奨学財団



編集・発行 一般社団法人 グローバル・クラスルーム日本協会(JCGC)

発行：令和7年7月